

羽倉崎北遺跡

17-1区の調査

2018年3月

泉佐野市教育委員会

はしがき

羽倉崎北遺跡は泉佐野市立佐野中学校プール新設工事に先立って行われた試掘調査で新たに発見された遺跡です。佐野中学校は泉佐野市の旧海岸線に面しており、調査地もそのほとんどが砂地でした。泉佐野市ではこれまで海岸線付近で中世以前の遺構が確認された例はなく、遺物も製塙土器等が堆積層から出土するに留まっています。

今回の調査では砂浜と陸地の境界線が確認され、その境界に沿って古墳時代後期の遺物がまとまって出土しました。このことは本遺跡の南西側に当時の集落が発展していたことを示しています。また、自然地形の成り立ちとして、浜堤と呼ばれる海岸線に沿った砂堤が時代によって変遷する様子が明らかになりました。このような大阪湾岸における調査は大阪府でも南端に位置する泉南郡岬町等でしか行われておらず、貴重なデータを得ることができました。

このような成果を上げることができましたのも関係者各位のご協力とご助力による賜物であります。この場を借りて感謝するとともに、これからも本市文化財行政に係るご理解とご協力を恵与されますよう、よろしくお願ひいたします。

平成 30 年 3 月

泉佐野市教育委員会

教育長 奥 真弥

例言

1. 本書は泉佐野市羽倉崎 4 丁目 3-12において、泉佐野市教育委員会教育総務課施設係が計画した市立佐野中学校プール及び管理棟建設工事に先立って行われた埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は、教育総務課文化財係が実施した。
3. 調査は文化財係 貝川 克士が担当した。現地における調査は平成 29 年 4 月 24 日～6 月 30 日に行った。遺物及び図面の整理は現地調査と併行して行い、本書の刊行を持って終了した。
4. 本書の執筆及び編集は貝川が行った。
5. 本書に掲載される標高は T. P. を使用し、土色は「新版標準土色帳」1998 年度版によった。
6. 調査に当たって撮影、作成した写真及び図面は市教育委員会で保管している。広く活用されることを望む。
7. 調査及び報告に際し、次の方々にご指導ご協力を頂きました。記して感謝いたします。(50 音順、敬称略)
一瀬 和夫(京都橘大学教授、泉佐野市文化財保護審議会委員)、井上 智博(公益財团法人大阪府文化財センター)、小倉 徹也(公益財团法人大阪市博物館協会)、西村 歩(歴史館いすみさの副館長)

目次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯	2
第3章 調査の成果	3
層位	3
遺構と遺物	7
第4章まとめ	13
遺物観察表	14

挿図目次

第1図 羽倉崎北遺跡とその周辺の遺跡	1
第2図 調査区設定図	2
第3図 調査区平面図	3
第4図 調査区俯瞰写真	4
第5図 北東壁面図南東半分	5
第6図 北東壁面図北西半分	6
第7図 北西壁面図	7
第8図 南西壁面図南東半分	8
第9図 南西壁面図北西半分	9
第10図 土坑1、土坑2 遺構平面図及び断面図	10
第11図 土坑1・2 及び包含層出土遺物	11
第12図 近世土坑遺構平面図及び断面図	11
第13図 近世土坑出土遺物	12
第14図 調査区壁面模式図	13

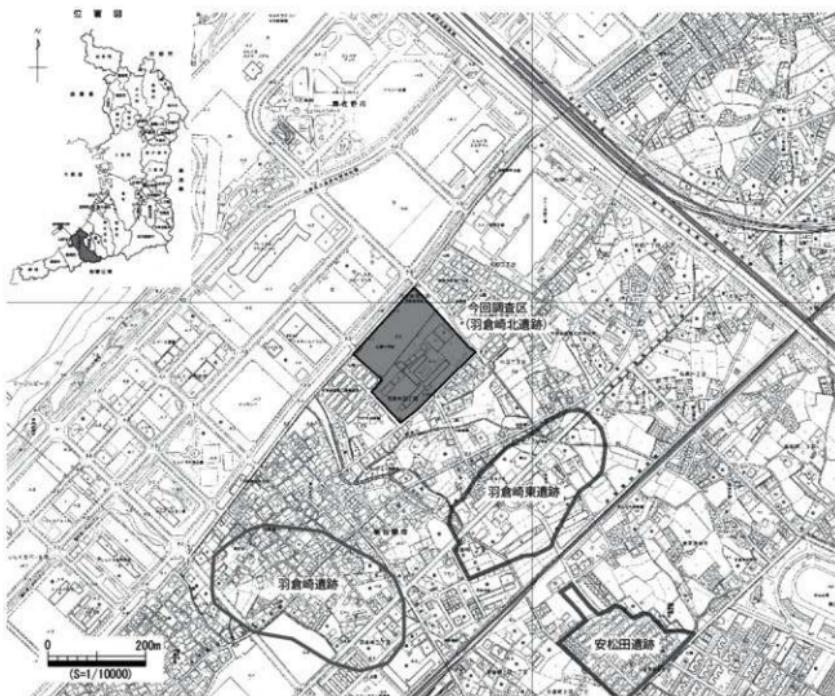
図版目次

図版1 上	調査区南半分（A区）	図版4 上	土坑1 檢出状況
図版1 中	調査区北半分（B区）	図版4 中	土坑1 完掘状況
図版1 下	調査区南西壁	図版4 下	土坑1 須恵器出土状況
図版2 上	調査区南西壁南東部	図版5 上	土坑2 遺物出土状況
図版2 中	調査区南西壁浜堤南東側端部	図版5 中	近世土坑半裁状況
図版2 下	調査区南西壁浜堤北西側端部	図版5 下	近世土坑釘出土状況
図版3 上	調査区北東壁浜堤南東側端部	図版6 上	出土遺物
図版3 中	調査区北東壁浜堤北西側端部	図版6 下	報告書抄録
図版3 下	調査区北東壁堆積の様子		

第1章 位置と環境

泉佐野市は大阪府南西部に位置している。和泉市以南の泉州各市は北に大阪湾を望み、南に和泉山脈を控えた南北に細長い市域を有し、短冊状に並行する。泉佐野市もその例にもらえない。市内には泉南市との境を流れる樅井川、中央を流れる佐野川、貝塚市との境を流れる見出川が主要3河川として和泉山脈から大阪湾に流れ込んでおり、市内の平野はこれらの河川による扇状地と河岸段丘によって形成されている。また、本市は瀬戸内気候に属しており、雨の量が相対的に少ないとことから、和泉山脈からの舌状に張り出す丘陵や埋伏谷を利用した溜池、それらを利用した灌漑用水路が発達している。先人の用水を確保するための苦労が偲ばれ、市内で古来よりの遺跡は樅井川右岸や佐野川左岸と川の近辺に集中しているのも頗る話である。

ところが、今回調査が行われた羽倉崎北遺跡は佐野川、樅井川の両河川から均等に離れている。遺跡の北西に安松川が流れているが、この川は飛行場建設時に埋め立てられた四つ池等から引かれていたもので古来からのものではないと考える。泉佐野市内で主要3河川から離れて存在する古代の集落は三軒屋遺跡内の長滝駅南西から西方かけて展開する弥生時代中期後半の集落、船岡山遺跡北方に位置する縄文時代晚期集落の2ヶ所に限られる。この内、三軒屋遺跡の集落は低位段丘面と冲積段丘面の境目に位置しており、この付近の低位段丘面の縁辺部から湧水する。集落付近には湯、湧、井と呼ばれる湧水池が点在しており、古来より取水源として利用してきたことは明らかである。船岡山遺跡の集落にそのような水源はないが、三軒屋遺跡兎田橋付近に広がる縄文時代後期から晩期にかけての集落から海岸線に向けて下した垂線上に位置してい



第1図 羽倉崎北遺跡(今回調査区)とその周辺の遺跡

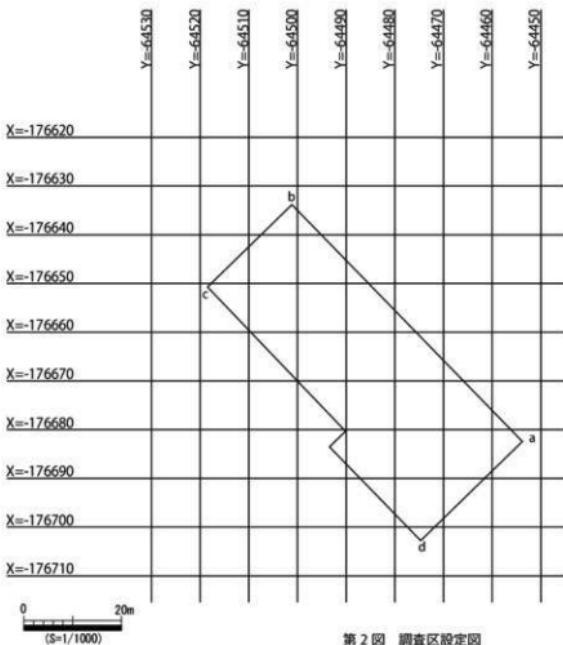
る。船岡山集落は遺構の検出量や遺物の出土量から兎田橋集落に規模の面で劣っており、製塩や漁労等、海浜部に位置するべき役割を担った兎田橋集落の分家集落ではないかと考えている。

羽倉崎北遺跡は今回新たに発見された遺跡である。経緯は後で述べるが、旧海岸線に面した市立佐野中学校敷地内が遺跡範囲である。佐野中学校の前身は大阪海技学校（昭和23年に海技専門学院分校から昇格）であり、その前は松林を控えた砂浜であったと思われる。明治42年、大正3年の地図や元禄二年（1689）に描かれた佐野村・湊村立会絵図にも当地が白砂青松で描写されている。

周辺の遺跡を俯瞰すると、南西に羽倉崎遺跡、南東に羽倉崎東遺跡、その更に南東側に安松田遺跡が広がっている。羽倉崎遺跡では古墳時代から中世にかけての遺物が出土するが頗るな遺構は確認されていない。羽倉崎東遺跡は古代のものとして、製塩土器が堆積層から散見される以外は中世の集落跡や中世後期以降の粘土採掘坑群が確認されている。安松田遺跡でも粘土採掘坑群が確認されているが、出土した瓦が東大寺再建時に使用された瓦であることが判明した。文献に記載がないことから発掘調査から判明した歴史として公表されたことも記憶に新しい。ただ、今回の調査で確認された主な遺構や遺物は古墳時代後期に属し、周辺の遺跡との関連性は窺いにくい。

第2章 調査に至る経緯

今回の調査は泉佐野市教育委員会教育総務課施設係が泉佐野市立佐野中学校内にプールの設置を計画したことによる。施設係から提出された試掘依頼書を受けて教育総務課文化財係が平成29年1月23日に現地において試掘調査を行った。その結果、古墳時代後期の壙の他、弥生時代後期の壺が出土した。この成果を受けて施設係と協議を行い、プール及び管理棟建設範囲全域において記録保存調査を行うことで合意を得た。



第2図 調査区設定図



第3章 調査の成果

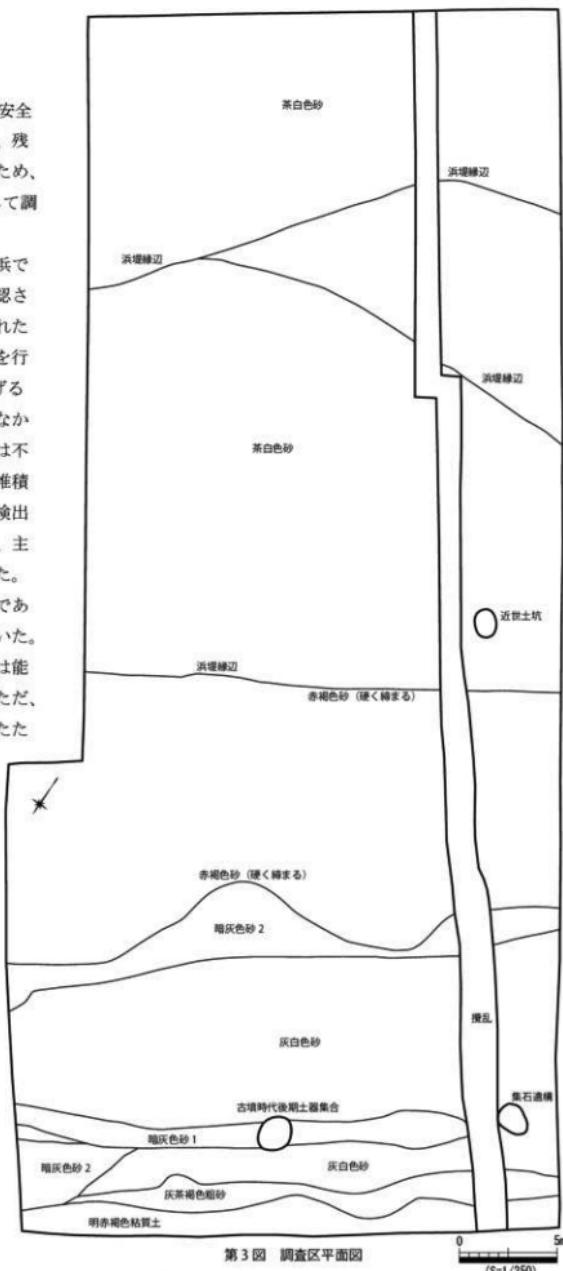
層位

調査区は運動場であり、児童の安全を図るため防護フェンスが張られ、残土の置き場所が制限された。そのため、調査区をA・B区に分割し、反転して調査を行った（第2図）。

調査地は南西縁辺部を除いて砂浜であり、試掘時に砂の堆積しか確認されなかつた。その為、瓶が確認された層位上面を遺構検出面として調査を行つた。遺構検出面から0.2m程下げるとな水し、掘削を中断せざるを得なかつたため、この面が地山かどうかは不明である。砂は壁面で確認すると堆積状況が確認できるが掘削して遺構検出面を追うことは非常に困難であり、主にレベルで判断せざるを得なかつた。また、掘削してから判明したことであるが、調査地には浜堤が横断していた。結果、浜堤に沿つて面を追うことは能わず、浜堤を削平してしまつた。ただ、壁面の様子から浜堤の消長が窺えたため後述する。

浜堤の北側と南側では平行堆積が見られるが遺物は含まれておらず、浜堤がいつ頃、どのような状況下で埋まり、平坦な砂浜が形成されたのか定かではない。また、南東縁辺では明赤褐色粘質土が確認され、後に述べる状況から古墳時代後期の陸地と砂浜の境目と判断された。

境目から海に向かって灰茶褐色粗砂、灰白色砂と変化するが、灰白色砂上面で陸地に沿つて帶状に暗灰色砂が堆積しているのが確認された。この暗灰色砂中には古墳時代後期の土器が含まれていた（第11図2、6、7）。

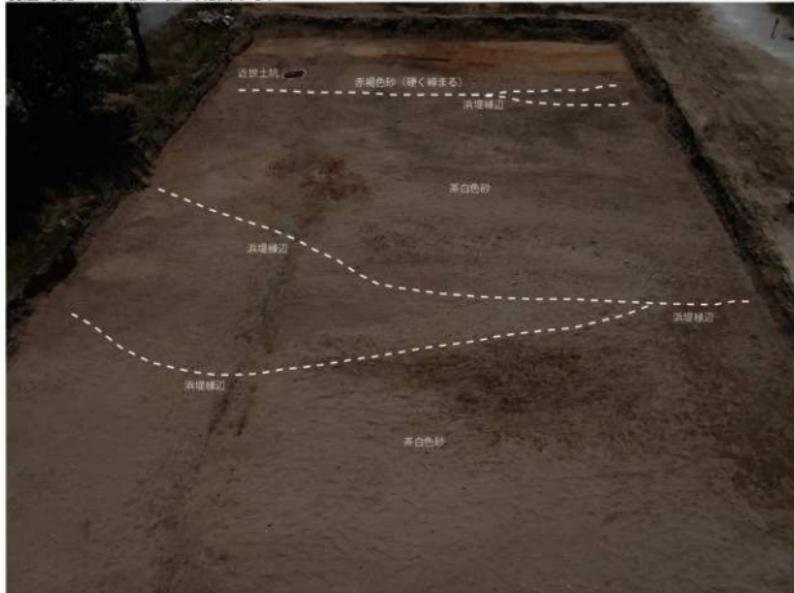


第3図 調査区平面図

羽倉崎北 17-1 区 A 区（南西から）

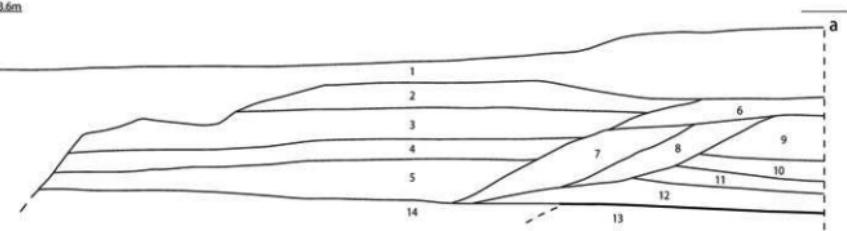


羽倉崎北 17-1 区 B 区（北西から）

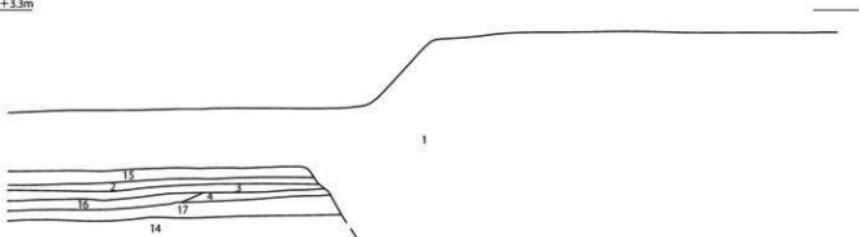


第4図 調査区俯瞰写真

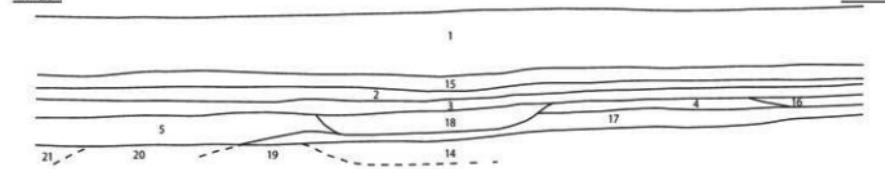
TP.+3.6m



TP.+3.3m



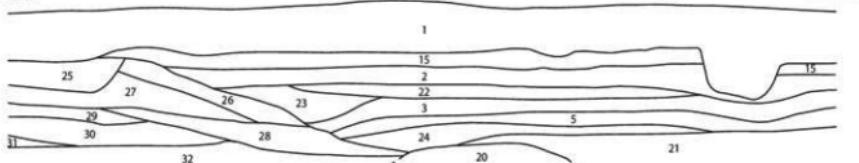
TP.+2.8m



TP.+2.6m



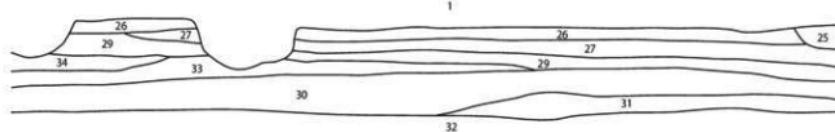
TP.+2.6m



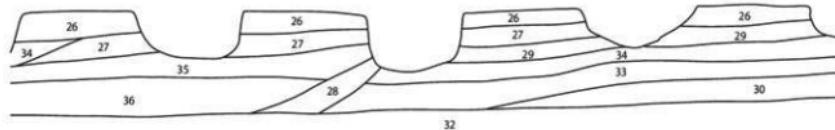
第5図 北東壁面図南東半分
(5)

0 1m
(S=1/40)

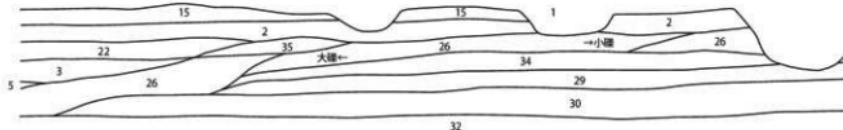
TP.+2.6m



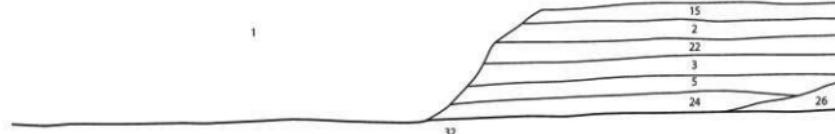
TP.+2.6m



TP.+2.5m

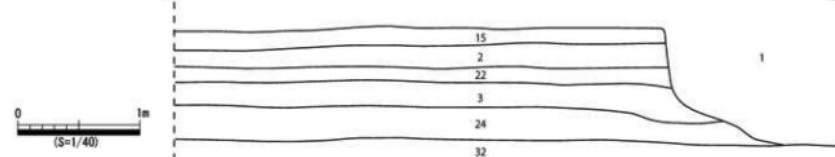


TP.+2.4m



TP.+2.4m

b

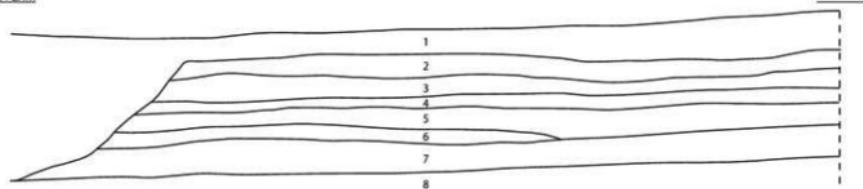


0 1m
(S=1/40)

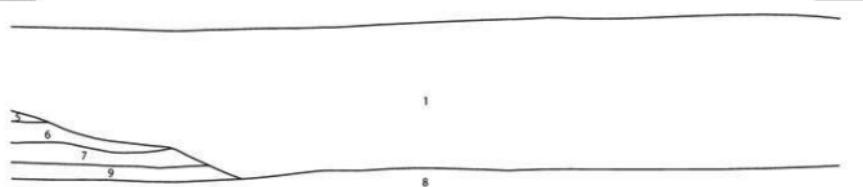
- | | | |
|--------------------|-------------------------|----------------------------|
| 1. 盛土 | 13. 10YR7/6 黄橙色細砂 | 25. 7.5YR3/4 暗褐色砂 (硬く締まる) |
| 2. 10YR5/6 小疊混黄褐色砂 | 14. 10YR8/3 浅黄橙色砂 | 26. 10YR5/6 黄褐色砂小疊少量混 |
| 3. 10YR5/8 黄褐色砂 | 15. 7.5YR5/6 明褐色砂 | 27. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂小疊少量混 |
| 4. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂 | 16. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 | 28. 10YR5/6 黄褐色砂小疊少量混 |
| 5. 10YR4/6 褐色砂 | 17. 7.5YR5/8 明褐色砂 | 29. 10YR4/6 褐色粗砂小疊中量混 |
| 6. 10YR7/8 黄橙色砂礫 | 18. 10YR4/4 褐色砂 | 30. 10YR4/6 褐色粗砂小疊大量混 |
| 7. 7.5YB1/1 灰白色砂礫 | 19. 10YR4/1 褐灰色砂 | 31. 10YR5/6 黄褐色粗砂小疊少量混 |
| 8. 2.5Y4/1 黄灰色砂礫 | 20. SYR4/6 赤褐色砂 (固く締まる) | 32. 10YR6/4 明黄褐色粗砂小疊～大疊中量混 |
| 9. 7.5YR6/8 橙色砂礫 | 21. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂 | 33. 7.5YR5/6 明黄褐色粗砂小疊少量混 |
| 10. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂 | 22. 10YR6/6 小疊混明黄褐色砂 | 34. 10YR5/6 黄褐色砂大疊少量混 |
| 11. 2.5Y8/1 灰白色砂礫 | 23. 10YR6/8 明黄褐色砂 | 35. 10YR4/6 褐色粗砂 |
| 12. 10YR5/8 黄褐色砂礫 | 24. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 | 36. 7.5YR5/6 明黄褐色粗砂 |
| | | 37. 10YR6/6 明黄褐色砂小疊～中疊中量混 |

第6図 北東壁面図北西半分

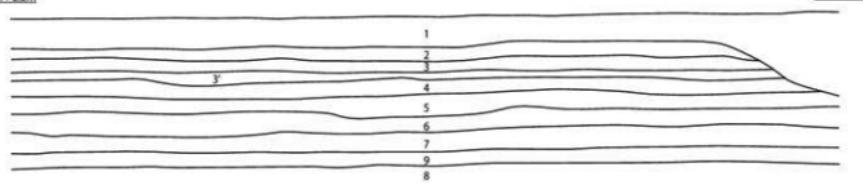
TP+2.4m



TP+2.3m



TP+2.2m



TP+2.2m

- 1. 盛土
- 2. 7.5YR5/6 明褐色砂
- 3. 10YR5/6 黄褐色砂
- 3'. 10YR5/6 黄褐色小礫混砂
- 4. 10YR6/6 明黄褐色小礫混砂
- 5. 10YR5/8 黄褐色砂
- 6. 10YR4/6 褐色砂
- 7. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂
- 8. 2.5Y6/2 灰黄色砂
- 9. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂



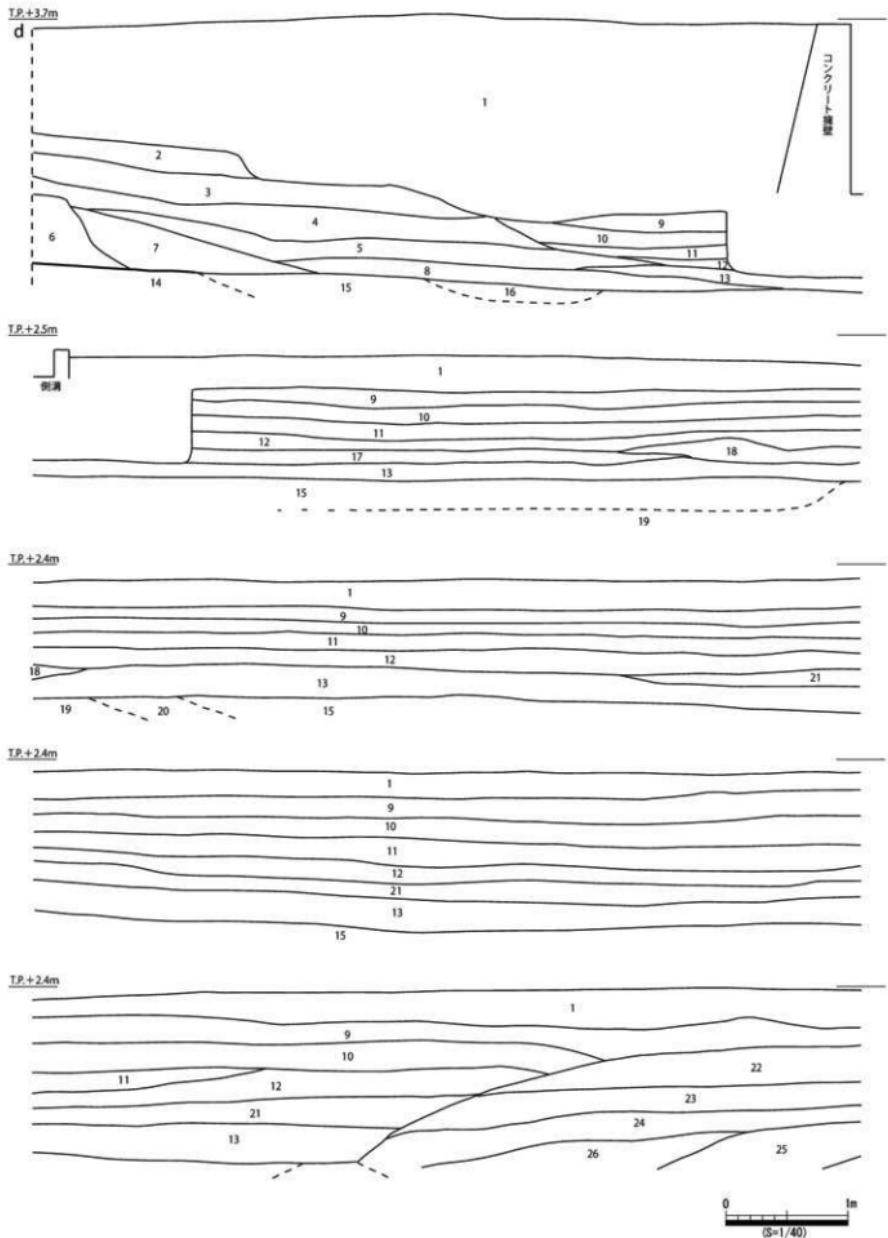
第7図 北西壁面図

遺構と遺物

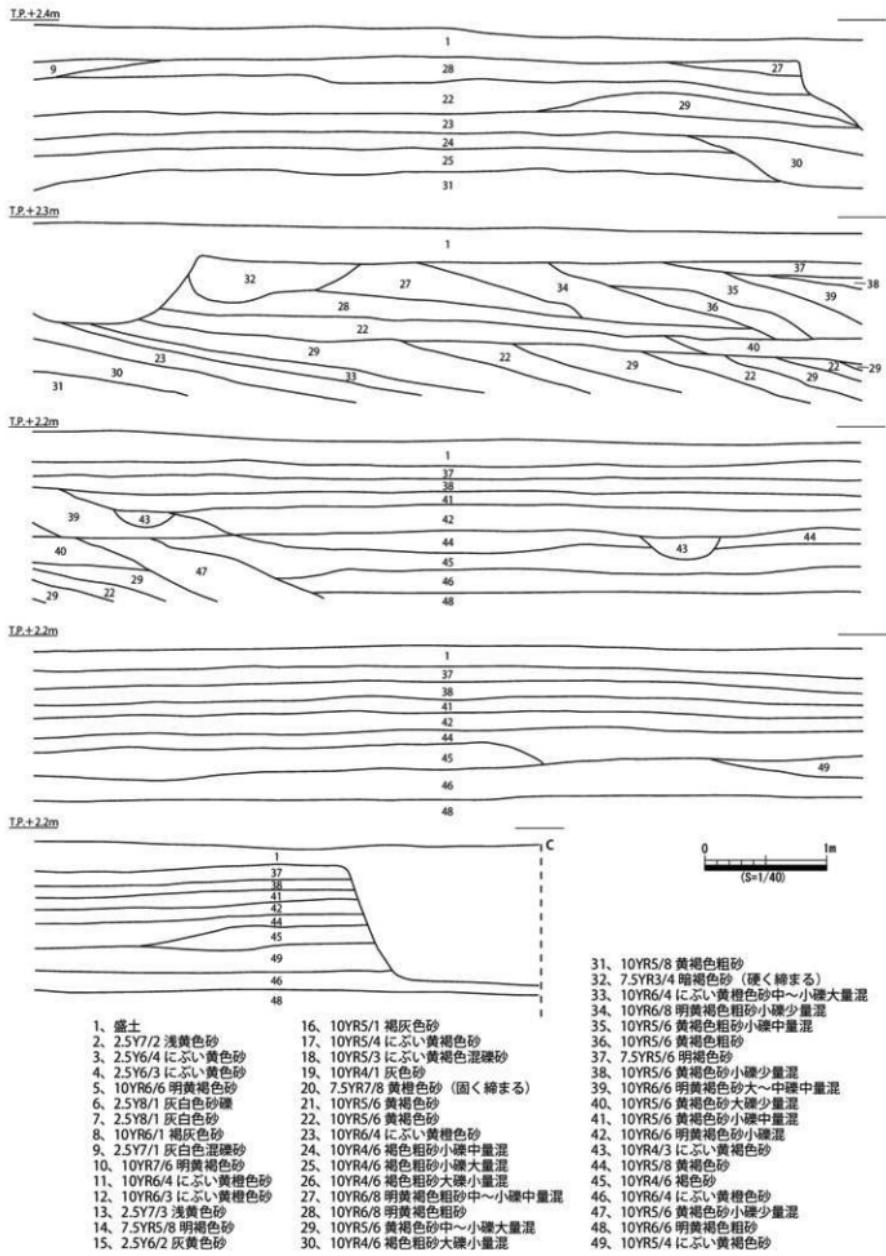
調査地で確認された遺構は3基のみでいずれも土坑である。

土坑1：調査区東角付近で検出された略梢円形状を呈する土坑であり、長径1.8m、短径1.2m、深さ0.1mを測る。北半分が少し落ち込んでおり、西側縁辺の一部が擾乱によって侵されていた。覆土は黒褐色砂と褐色砂に分かれるが、基盤となる層は明褐色砂である。土坑の内部には径0.2m前後の石及び須恵器壊が散在していた（第11図8～11）。その様子から組まれた石が崩れて散らばった様に見え、当初は炉の可能性も考えたが、石に確実な被熱の痕跡は確認できず、床面の硬化、赤変の様子も窺われず、覆土に炭の混入も見られない。出土遺物から古墳時代後期のものと思われる。東側に隣接する土坑からは同時期の甕の破片が出土している（第11図1、3）。

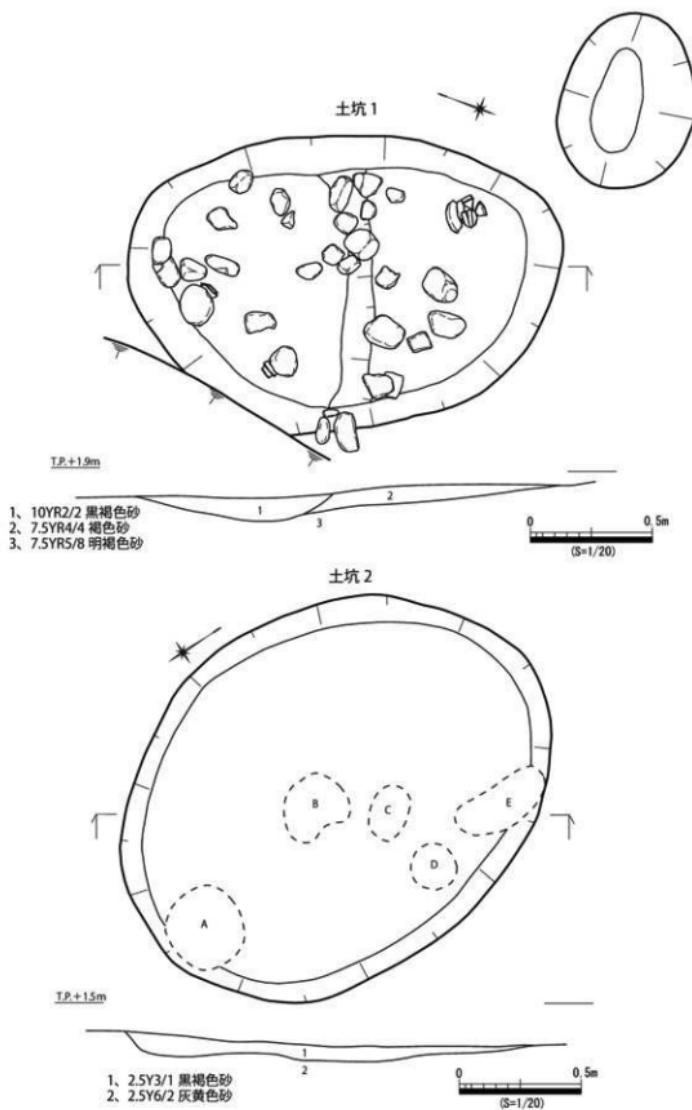
土坑2：調査区南東縁辺付近中央部で検出された梢円形状を呈する土坑であり、長径1.9m、短径1.5m、



第8図 南西壁面図南東半分

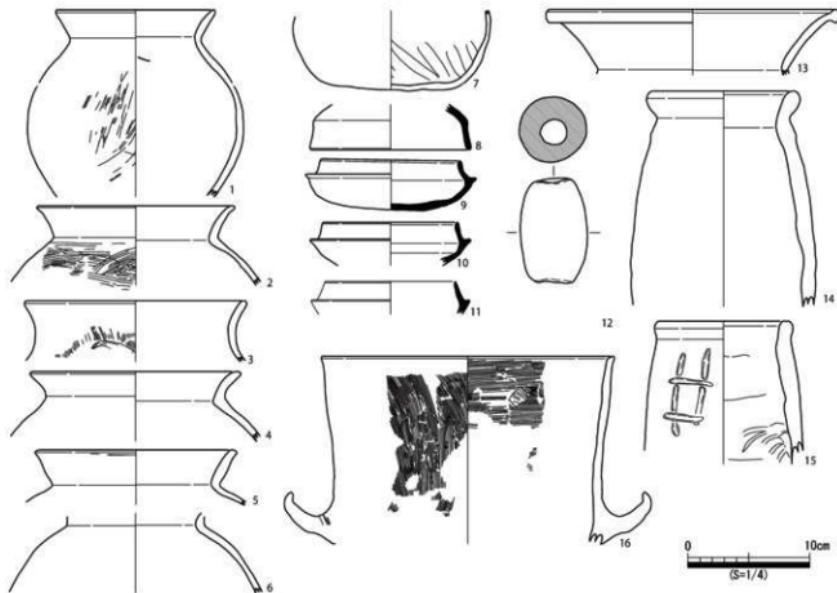


第9図 南西壁面図北西半分

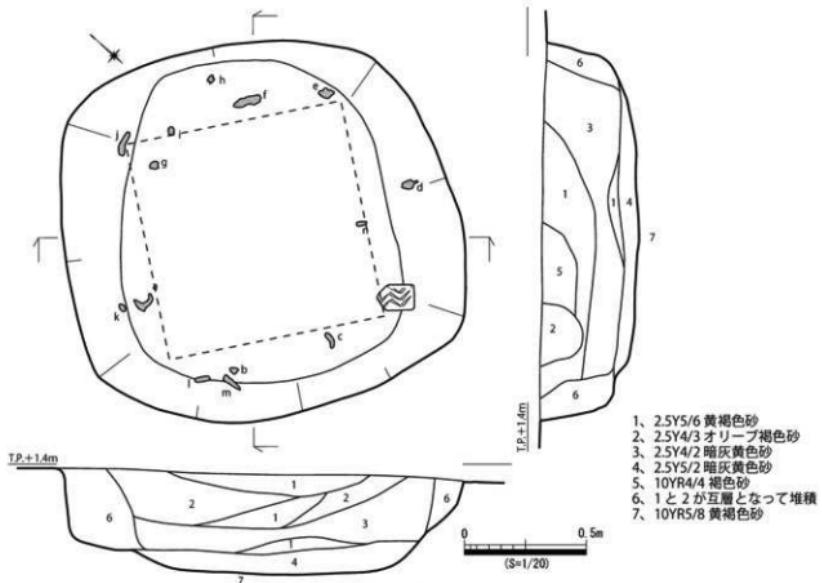


第10図 土坑1、土坑2 造構平面図及び断面図

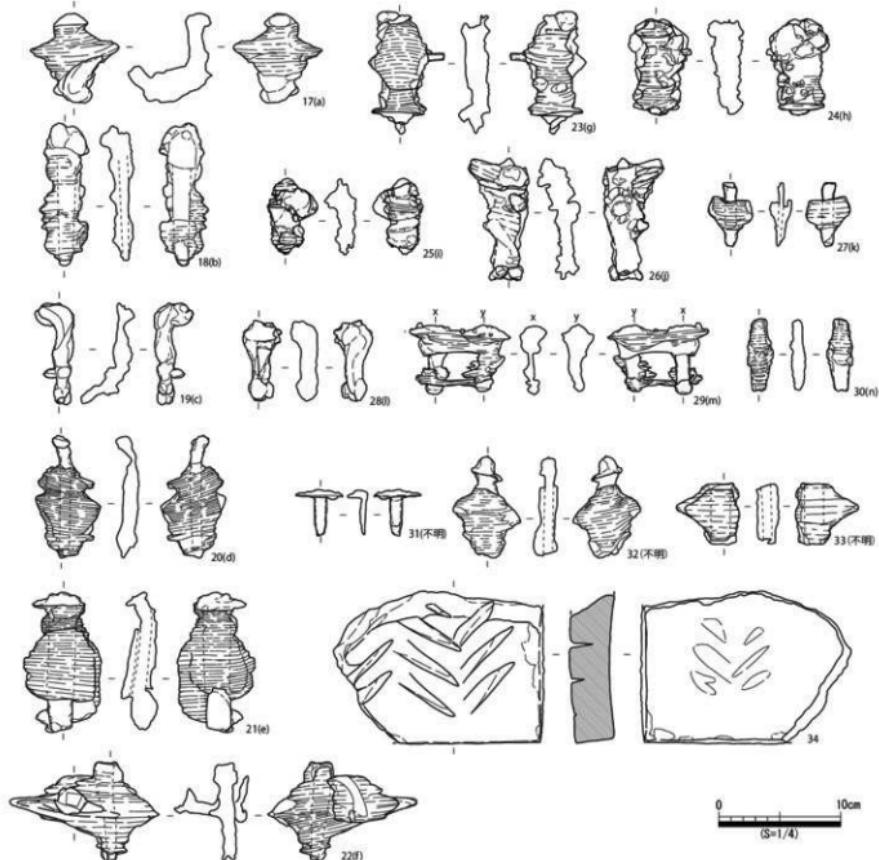
深さ0.1mを測る。内部には土師器の集積が5ヶ所において見られたが、いずれも小片で覆土が砂であることから遺物の保持が難しく、集積範囲を記録するに止めた。範囲A、Cから出土した遺物のみ実測できた（第11図4、5）。



第11図 土坑1・2及び包含層出土遺物



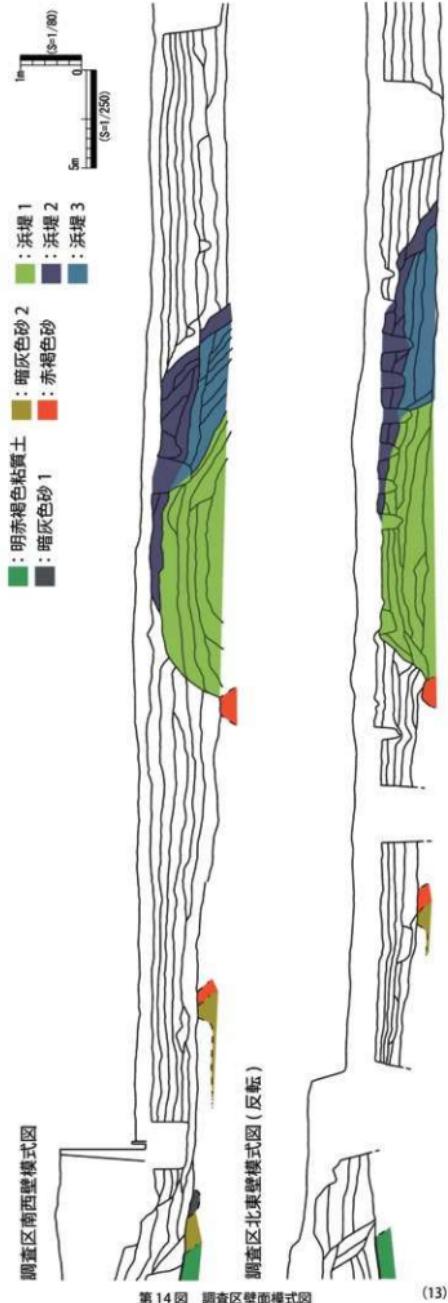
第12図 近世土坑遺構平面図及び断面図



第13図 近世土坑出土遺物（アルファベットは、第12図参照）

近世土坑：B区東角付近で検出された、径 1.6m、深さ 0.4m を測る隅丸方形の土坑である。底は平坦で壁はほぼ直に立ち上がる。覆土は桶等を埋設して周囲を充填して埋め、その後、内部が崩落して一気に埋まった様相を呈している。覆土からは混じりこみと思われる古墳時代後期の甕と近世瓦の他、鉄釘が出土している。鉄釘は平釘で鉄分が浸透した木部と融着した状態で出土しており、その総数は 17 点を数える。基本的に鉄釘は板材の小口から木目に直行して打たれており、頭を天にした状態で検出されているが、2 本融着しているものがあり、材に並行してクロスするもの（23）、板面から打ち込まれてクロスするもの（22）、短距離で並列するもの（29）がある。

これらの状況から方形の桶または木枠が埋設されていたものと思われる。その大きさはおよそ、0.9m 四方に想定され、第 12 図に方形の点線枠で示した。単独で砂浜に位置していること、副葬品と思われる遺物も出土していないことから墓とは考えにくく、井戸でもないと思われ、その用途は不明である。



第 14 図 調査区壁面模式図

第 4 章 まとめ

今回の調査は調査区南西端部の陸地を除くとその大部分が海浜部の砂地であった。地山は確認できず、色、土質の変化の大きい砂を基盤層として遺構検出を行ったため、試行錯誤を重ねたものとなつたが、望外の成果が得られたと思う。

1. 古墳時代後期土器群の出土について

調査区南端部には陸地に平行して、暗灰色砂層が幅 2 ~ 3m 深さ 0.1m 程の帯状に堆積しているのが確認された(暗灰色砂 1)。小規模の後背湿地と想定され、この砂層中から広範囲にわたって古墳時代後期の土師器及び須恵器が出土した。多くは甕であった。人力掘削時にも数は少ないが蟠蓋や弥生時代後期の壺、土錘等が出土しているが、ローリングを受けている。古墳時代後期の土器はローリングを受けていないため、後背湿地に廃棄された土器がそのまま埋まつたものと思われ、今回の遺構検出面が古墳時代後期の生活面に想定されよう。未だ確認されていないが、調査区南西に集落が存在する可能性が浮かび上がってきたのである。また、特筆すべき遺物として平底甕型の製塩土器が出土した。和歌山市の製塩遺構群が確認された西ノ庄遺跡でこの時期の製塩土器として出土しているものと酷似しており、泉佐野市では初めての発見となる。

2. 当地海浜の変遷について

時期は不明だが、当初は 12 ~ 13m 程の幅を持つ後背湿地が陸地から広がっていたものと想定される(暗灰色砂 2)。この暗灰色砂 2 は北東端部で堤状に隆起しており(検出面では帯状に確認される)、灰白色砂の下を潜って陸地に接する部分で再び現われる。この灰白色砂の上面で暗灰色砂 1 が検出されていることから、暗灰色砂 2 で構成される後背湿地が広がっていた時期とそれが灰白色砂で覆われるまでは古墳時代後期以前に想定できる。その後、後背湿地の北東側堤状隆起に海風による砂の流れがせき止められる形で、赤褐色砂による浜堤が形成さ

れたと考える。赤褐色砂はA区北東部及びB区南西端部に帶状に確認されており、この層位を両端とする浜堤が暴浪によって浸食されたと考えると説明がつく。赤褐色砂の浜堤は削平されたが、海側縁辺の隆起に影響されて再び浜堤が形成される（浜堤1）。その後、暴浪が続き、浜から砂が寄せるが浜堤1を乗り越えることができず浜堤1の海側に溜り、浜堤を海側に拡張していく（浜堤2・3）。最終的に浜堤は埋没し平坦な砂浜となるのだが、浜堤の両側は平行堆積となっていて一気に埋まつたものと思われ、津波や台風等の大規模な災害も想定される。

今回の調査は泉佐野市では初めての海浜部での調査になった。泉州地域でも海浜部での調査はなく、多様性がある海辺のはんの一部の調査であるが、貴重なデータを得ることができたと考えている。上述した海浜部地形の変遷はあくまで想定であり、これから調査が増えることによって補強、訂正していかたい。

また、古墳時代後期遺物の集中出土及び製塩土器の出土は想定外のものであった。これまでの周辺における試掘調査では遺構や遺物は確認されていないが、遺跡南西側で調査が進んでおらず集落が存在する可能性がある。そしてその集落は主要河川から離れていることもあり、製塩等の役割を持つ作業集団的なものとも考えられよう。

注) 暴浪：大規模な低気圧の通過に伴って発生する。

遺物観察表

捕団番号	遺跡名 地区名	出土地区	出土 遺構	法量(cm)			色調	種類	その他
				口径	器高	厚さ			
1	羽倉崎北 17-1区	A区	土坑1東側土坑	(13.2)	(15.3)	0.3-0.6	内：SY6/6 横 外・断：7. SY6/3 にぶい黄 外：10YR6/2C 黄褐色 外・断：7. SY7/4C にぶい橙 外：10YR8/2C 黄褐色	甕	
2	〃	〃	暗灰色砂1	(16.2)	(6.5)	0.35-0.8	内・外：7. SY6/6 横 外：10YR4/2C 黄褐色 外・断：7. SY6/6 横	甕	
3	〃	〃	土坑1東側土坑	(18.2)	(5.0)	0.35-0.65	内・外：7. SY6/6 横 外：10YR4/2C 黄褐色 外・断：7. SY6/6 横	甕	製塩土器の可 能性
4	〃	〃	土坑2 C	(17.2)	(8.7)	0.5-1.0	内：10YR7/3C にぶい黄 外・断：7. SY6/6 横 外・断：7. SY6/6 横	甕	
5	〃	〃	土坑2 A	(16.5)	(4.6)	0.25-0.85	内：10YR7/3C にぶい黄 外・断：10YR6/3C にぶい黄褐色	甕	
6	〃	〃	暗灰色砂1	胸記残存径 (26.7)	(6.6)	0.4-0.7	内・外：7. SY6/6 横 外・断：7. SY7/4C にぶい橙 外・断：7. SY6/4C 黄褐色	甕	
7	〃	〃	暗灰色砂1	胸記残存径 (16.2)	(6.6)	0.2-0.6	内：10YR6/2C 黄褐色 外・断：SY6/4C にぶい黄 外・断：SY6/4C にぶい黄 外・断：7. SY6/2C 黄褐色	製塩土器	
8	〃	〃	土坑1	(13.2)	(3.7)	0.35-0.55	内・外：NS/0灰 外・断：2. SY6/1赤灰	須恵器 杯身	
9	〃	〃	〃	11.7	4.25	0.3-0.6	内・外・断：7. SY6/1灰	須恵器 杯身	
10	〃	〃	〃	(11.2)	(3.55)	0.3-0.5	内・外・断：7. SY6/1灰 外・断：7. SY6/2C 黄褐色	須恵器 杯身	
11	〃	〃	〃	(10.8)	(2.7)	0.1-0.5	内・外・断：7. SY6/1灰	須恵器 杯身	
12	〃	B区	検出面直上層	長さ 8.6	幅 5.5		10YR7/4C にぶい黄褐色	土師質 土罐	
13	〃	〃	〃	(24.1)	(5.4)	0.5-0.7	内・外・断：2. SY7/1灰白	甕	弥生時代後期
14	〃	〃	〃	(12.6)	(17.65)	0.2-0.65	内・外・断：10YR7/3C にぶい黄褐色	埴造	
15	〃	〃	〃	(11.4)	(11.75)	0.9-1.3	内・外・断：10YR7/4C にぶい黄褐色	埴造	ヘラ記号あり
16	〃	〃	〃	(24.1)	(15.4)	0.5-1.0	内：SY6/4C にぶい黄褐色 外：SY7/4C にぶい黄褐色 外：SY7/6灰	甕	
17~33	〃	〃	近世土坑					鉢釦	
36	〃	〃	〃	具き(横) 12.5	幅 (最大) (17.3)	3.4	凹・凸：SY5/1灰白 断：7. SY8/1灰白	瓦	

0 : 検定 0 : 残

図版



海浜部が埋め立てられる前の泉佐野(昭和61年)

図版1



調査区南半分(A区)



調査区北半分(B区)



調査区南西壁

図版2



調査区南西壁南東部



調査区南西壁浜堤南東側端部



調査区南西壁浜堤北西侧端部

図版3



調査区北東壁浜堤南東側端部



調査区北東壁浜堤北西側端部



調査区北東壁堆積の様子

図版4



土坑1検出状況



土坑1完掘状況



土坑1須恵器出土状況

圖版5



土坑2遺物出土狀況



近世土坑半裁狀況



近世土坑釘出土狀況

図版6



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はぐらざきたいせき						
書名	羽倉崎北遺跡						
副書名	07-1区の調査						
巻次							
シリーズ名	泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	73						
編著者名	貝川 克士						
編集機関	泉佐野市教育委員会						
所在地	〒598-8550 大阪府泉佐野市市場東1丁目295-3 Tel. 072-463-1212 内線2346						
発行年月日	2018年3月						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	○ノメ			
羽倉崎北遺跡	いせき 泉佐野市羽倉崎	27213	13	34 22 40	135 19 20	2017/4/24～ 6/30	1710 ブール新設
所収遺跡名	主な時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項		
羽倉崎北遺跡	古墳後期 近世	集落跡	土坑	土師質土器、須恵器、瓦、釘	古墳時代後期 集落の存在 暴浪による浜堤 の変遷		
		自然地形	浜堤				

